

かけがえのない

沼田 彩（東京女子医科大学看護学部4年）

助産師になるという夢を追いかける中で、自分が「かけがえのない」ものを得ていることに気付く。「助産師になるためには、複数のことを並行してやり遂げる能力が必要である」と語った師の言葉を心に留め、勉学、サークル活動、アルバイトの両立に無我夢中で取り組んだ日々…動機付けの困難な課題を目の前にし、簡単に乗り越えられない自分に、「こんなところでつまずいて、助産師になれるのだろうか…」と、大きな不安を抱いたこともあった。しかし、そんなとき私を支えてくれたのは、他でもなく、私自身がエネルギーをかけてきたこと、そして、その中で出会った人々であった。今を大切に生きているか、自分に問いかけるきっかけをくれた音楽部。相手を思いやる優しい気持ちが、次の優しさを生み出すことを教えてくれた小児医療研究会「連」。目的・目標が先行する大学生活であるが、多くの経験に彩られ、感動、感激、感謝で心満ちる日々であった。決して楽とは言えない道の選択に、看護への思いだけはグレーにならないのは、看護を学んで過ごした時間が、看護への不振感や諦めではなく、可能性や希望を見出せるものであったからだろう。仲間や教員という身近な存在に、看護への夢を持てる環境であったことを、誇りに思う。やりたいこと、やるべきことを、キレイに、上手にこなせた私ではないけれど、諦めずに精一杯やってみて良かったと心から思っている。

助産師として、一人の人間として、大切なものを手放すのではなく、自分の力で精一杯守り抜く選択が出来るように…あの時の師の言葉には、このような私たちへのエールが込められていたのではないかと振り返る。看護は、人との繋がりに信念を持ち、夢を抱くことを許されている場であるように思う。大切なものを大切にできる安心感と心強さを学んだ私は、そこを自分の生きる場とし、看護を必要とする人たちの大切なものを守れる助産師になりたい。